



聖書箇所:創世記3章14~19節  
『人とは何ものなのでしょう』

**[1] 人とは何ものなのでしょう**

- ・「人とは何者なのか？」…古今東西、誰もが一度は抱く疑問

**[2] 神は人を生きるものとされた**

- ・神の宣告

— 蛇（その背後で操るサタン）にはのろい（創世記 3:14-15）

— 女（エバ）には出産に伴う苦しみ（同 3:16）

— 人（アダム）には労働に伴う苦しみと困難（同 3:17-19）

▷互いに愛し信頼する人間関係から、相手を利用し力で支配する関係へ

**[3] 希望の約束「彼はお前の頭を打つ」**

- ・宣告の中の希望の光

— 創世記 3:15 = 「原福音」と呼ばれる最初のメシア預言

▶ 女の子孫、すなわちイエス・キリストがこの世に来られ、サタンの力を打ち破ること。キリストは十字架の苦しみを通して、私たちの罪を贖い、サタンの頭を打ち砕いてくださる。

— キリストを信じる者たちへの約束

▶ 信仰によって「神の民」に加えられ、霊的な戦いで勝利する者へ (ロマ 16:20)

— 戦いの勝利の約束

▶ 「おまえの子孫と女の子孫」の戦いはキリストの勝利によって終わりを迎える (I コリント 15:24-25)

- ・詩篇の作者ダビデの問い：「人とは何ものなのでしょう。あなたが心に留められるとは。

人の子とはいったい何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは。」 (詩篇 8:4)

▶ 「人」（ヘブル語：エノーシュ）＝「はかない者」「死すべき存在」

▶ 「人の子」（ベン・アダム）＝「土から造られた者」

→ 「心に留める」＝人のために神が働きかけている様子

→ 「顧みる」＝関心を持って近づく

▷ダビデは、永遠の神と、罪の結果、滅びに向かって歩む、弱くもろい人間との違いを深く見つめながら、そんな人間を「心に留め」、「顧みてくださる」神の愛に感嘆したのです。私たちもこの神の愛の眼差しに信頼し、希望を持って天の都を目指して歩みましょう。

「自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らはいのちの木の実を食べる特権が与えられ、門を通過して都に入れるようになる。…これらのことを証しする方が言われる。『しかり、わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ、来てください。」 (黙示録 22:14,20)